第九回

星槎文芸大賞

令和五年度

受賞作品集

学校法人 国際学園

「兎と華」早瀬　遥香（星槎国際北九州２年）

「真白な雲海」
桒原　純花（星槎学園北斗校中等部２年）

「雲騰致雨 露結為霜金生麗水玉出崑岡」
神田そよか（星槎国際北広島1年）

「花衣」
小野　優（星槎国際小田原３年）

星槎文芸大賞　実施要項（一部抜粋）

1. 目的

文芸創作活動に取り組むことで、関わり合いを大切にする星槎で育まれた感性を磨き、コミュニケーション能力、自己表現力を育て、作品を通した全国の仲間との交流の中で発見と感動の場をつくる

2. 応募資格

星槎国際高校、星槎学園、星槎中学校、星槎もみじ中学校、星槎名古屋中学校及びフリースクール在籍生徒

3. 募集部門

①小説　②小論文　③エッセイ
④詩　⑤俳句　⑥短歌

4. 応募規定

①校内選考後の出品は生徒一人につき、一部門にしぼり、作品数も一点に限る
②応募作品は未発表作品に限り、他賞との二重投稿を禁止する
③受賞作品は発表時に修正を求める場合がある
④受賞作品の出版権などの諸権利は星槎国際高等学校に帰属する

編集後記

星槎学園大宮校　山口　貴志

今年度も本作品集刊行のため、ご協力いただきまして誠にありがとうございます。各校で選考された三四作品が集まり、例年にも増してより精錬された作品の世界観に驚くばかりです。また、特別審査員として参加していただいた伊藤玄二郎先生（かまくら春秋社代表取締役、星槎大学教授）のご配慮により、今年度も作品を文芸誌「詩とファンタジー」にて誌上発表していただき、著名な方々から講評をいただくことができました。さらに、星槎大学嶋田優先生、星槎道都大学飯浜浩幸学長にも審査を賜りました。特に今年度から、全学年、全部門エントリー可能となり、各部門で活躍の場が広がりました。本作品集において、作品と作品、人と人とが出会い、共感し合うことができれば大変嬉しいです。

年度を重ねるたびに、作品により磨きがかかり、生徒一人ひとりの趣向を凝らした作品は、読み手に大きな感動を与えてくれます。また、その感動は人の生きる原動力となります。いつの時代も、人の心を動かすのは、「言葉」であり、綴られた「言葉」には作り手の「思い」が込められています。人の心を動かす「星の輝き」と「星槎の心」を、誰しもが心に秘めています。本作品集から感化され新たな星槎らしい作品が誕生することを心待ちにしております。

YouTubeをはじめとする動画視聴が全盛の時代だからこそ、「文字」の持つ力や想像性を改めて感じました。読み始めたまま机に置きっぱなしにしていた文庫本を、久しぶりに手にしてみようかと思います。

末筆ながら、本作品集刊行に至るまでご協力いただきました、塩谷実行委員長をはじめ、各委員の先生方、各校舎ご担当者様、誠にありがとうございました。そして、素晴らしい作品をエントリーしてくださいました生徒の皆さんに御礼申し上げます。来年度もより感性を発揮した作品の応募があることを楽しみにしております。

編集委員

監　修　塩谷　貴男（文芸大賞実行委員長）
編集長　山口　貴志（星槎学園大宮校）
委　員　河口　優花（星槎学園大宮校）
委　員　須田　心作（星槎国際郡山）
委　員　脇屋　洋子（星槎国際横浜鴨居）
委　員　天野　桂一（星槎国際富山）
委　員　大平奈美佳（星槎国際那覇）

星槎文芸大賞　令和五年度受賞作品集

令和六年一月二三日発行
編集者　前田　豊
発行者　星槎国際高等学校
〒〇〇四―〇〇一四
北海道札幌市厚別区もみじ台北五丁目一二―一
TEL　〇一一―八九九―三八三〇
FAX　〇一一―八九九―三八三五
印刷　（株）横浜綜合写真

令和五年度受賞作品

【最優秀賞】
詩　「混色」……星槎学園大宮校中等部　三年　宮﨑菜々子　2
【優秀賞】
詩　「現像」……星槎国際富山　二年　吉田　茉央　2
【優秀賞】
小説　「友人」……星槎国際川口　二年　榎本万里香　3
【優秀賞】
俳句　……星槎国際郡山　二年　鈴木　果凛　10
【審査員特別賞】
エッセイ　「私の背中を押した言葉」……星槎国際福井　二年　小林　侑奈　11
【星槎大学長賞】
小論文　「環境保護のために私たちができること」……星槎国際郡山　二年　米澤　悠璃　12
【星槎道都大学長賞】
小説　「諦観した子ども」……星槎国際北広島　三年　正木　ひな　13
【部門賞】
小説　「幻想郷の九尾」……星槎国際北広島　三年　前田　礼　18
【部門賞】
小論文　「個人のジェンダー観」……星槎国際浜松　一年　河島　悠人　28
【部門賞】
エッセイ　「不戦敗は」……星槎国際立川　二年　室田梨紗子　29
【部門賞】
詩　「二人の兄」……星槎国際仙台　二年　小幡　星奈　31
【部門賞】
俳句　……星槎学園大宮校高等部　一年　夏秋　拓真　32
【部門賞】
短歌　「祭り」……星槎国際厚木　一年　岸本　そら　32
【生徒会特別賞】
俳句　……星槎国際大阪　一年　上田　七海　32

【最優秀賞　詩部門　受賞】

「混色」

星槎学園大宮校中等部
三年　宮﨑菜々子

夕方の帰り道　空を見上げた
オレンジ、青が混ざり合う色
電柱からのびる線が、まるで楽譜のようだった
車の音、人の話す声、歩く音
全てが音楽を奏でているかのように聞こえた
夜が近づいていることを知らせてくれるように
ああ、今日が終わる
何か特別なことはなかったけど
そんな毎日が愛おしい

「夕方」
佐々木結加（星槎国際浜松３年）

「寝てるところがカワイイ」
森脇　那月（星槎国際名古屋１年）

【優秀賞　詩部門　受賞】

「現像」

星槎国際富山
二年　吉田　茉央

星の大群に囲まれて
白飛びしてしまった帰り道
フラッシュが似合うような
真夜中の空になりきれなかった
光に透ける　真の姿
嘘でついた色が汚く残っても
コントラストを調節して
明暗を分ければ　美しく仕上がった
ぼやけた未来が
フィルムの中なら馴染んでくれた
ピントが合わないのは
目的が見つかっていないから
星が消えた真夜中の夜
涙の表面張力　フィルムにこぼした
使い物にならない過去は捨てて
新たなフィルムで巻き返そうか

【優秀賞　小説部門　受賞】

「友人」

星槎国際川口
二年　榎本万里香

「樹～！」
　車の運転席のドアを開けると母の声がした。それと同時に聞こえてくるのはけたたましく響く蝉の声。見上げれば、立派な入道雲が悠々と空高くそびえていた。大人になり、家を出た今もずっと心に染み付いているその情景は、僕、岡田樹の故郷に違いなかった。
「樹！　なにボーッとしてるの。暑いんだから早く家に入りな。」
　そう言って足早に玄関へと向かっていった母さんは、しばらく見ない間に少し老けこんだだろうか。
「うん、すぐ行くよ。」
　その言葉とは裏腹に、僕の意識は別のところにあった。ふぅ、と息をつくと、デコボコした砂利道へと視線を落とす。少しの間そうして心を落ち着かせると、おそるおそる顔を上げた。僕が見る先には、以前にも増してみすぼらしく変わり果てた、古い家があった。先ほどまであんなに煩かった蝉の声が、途端にふっと遠のいた気がした。思い出の家の変わり果てた風貌に、胸が痛む。僕は重い足取りで歩き始めた。が、誰も手入れをしていない庭には、元気に伸びた雑草が、膝の高さまで生い茂っていた。なんだか泣きそうな気持ちになった僕は、スラックスと革靴が汚れるのも憚らず、雑草の中にザクザクと足を踏み入れていった。……雨が降ったあとだということをすっかり忘れていた。そう気付いたときにはもう遅い。布越しにじんわりと水が染み込んでくる。おまけにペタペタと肌に張り付いて、何というか、嫌な感覚だ……。
　やっとの思いで玄関の前に辿り着き、まず始めに目が行ったのは、濡れた大きな蜘蛛の巣だった。ドアを開けさせまいとしているかのようなその蜘蛛の巣を見れば、この古びた家に住人の帰りがないことは明らかだった。分かっている。もうあの人がここに戻ることはないのだろう。
　表札の「玉川」の文字だけが、昔と変わらずそこに在り続けていた。

　僕が玉川さんと出会ったのは、十六年前、僕が九歳の誕生日を迎えた頃のことだった。その頃の僕といえば、それはそれは憂鬱な日々を送っていた。仕事で忙しい母には構ってもらえず、学校ではいじめられて友達もいない。十年前、妊婦の身体ではるばるこの村に越してきた母を、この村の住人は良く思っていなかった。十年経ってもそれは変わらず、母は勿論、僕も同じく余所者扱いを受けていた。……地獄のような日々

だった。そんな時、ずっと空き家だった隣の屋敷に誰かが越してきたのだ。その男は、うちの玄関の扉を叩くと、優しい声でこう言った。
「ごめんください。今日こちらの家の隣に越してきた玉川と申します。どなたかいらっしゃいますか。」
　僕が慌てて玄関に駆け寄ると、大きな影が扉の前に佇んでいるのが見えた。滅多に来客がない家だったこともあり、僕は怖くなって、母を呼びに、今度は家の奥へと急いで駆けていった。
「ねえ、ねえ！　お母さん、起きてよ！　お客さんだよ！　一緒に来て！」
　机にうつ伏せで寝ていた母を、一生懸命揺さぶった。
「うーん……樹、あんまり揺らさないでよ……。」
「お母さん！　お客さんだってば！　早くしないと行っちゃうよ！」
　まだ眠たそうに目を擦っていた母がピクリと反応した。
「ん……？　……お客さん？」
　眠たそうな目がこちらを見る。僕は大きく頷いた。母の顔が見る見るうちに寝ぼけ顔から、いつもの顔になった。先ほどの僕より慌てて玄関先へ向かう母の後を追いかける。
「すみません！　今出ますので！」
　玄関を開ける音がした。僕は怖い気持ちと同時に、隣に越してきた人物がどんな人なのかを知りたいとも思った。床に視線を落とし、拳を握りしめると、おそるおそる玄関の方を覗き込む。そこにいたのは、母よりずっと年上の優しげな風貌の男だった。ただ僕の場合、少しややこしいことになる。何故なら僕の母は、若くして母になった人だったからだ。加えて、父とは僕が生まれる前に離婚していた。そういった事情もあり、僕にとっては母よりも年上の男性というのは怖くもあり、知りたくもある、未知の存在だったのだ。
　僕がじっと見ていると、彼もこちらに気が付いた。目が合うなり固まってしまった僕に、彼は懇切丁寧に話しかけてきた。
「君はここの子ですか。私は、今日隣に越してきた玉川と申します。せっかく隣人になったんです。良ければ仲良くしてくださいね。」
「あ……。」
　まだ固まったままの僕の代わりに母が答える。
「すみません、この子人見知りで。」
「いえ、お気になさらず。ああそれと、これ、良ければ食べてください。」
　玉川はそう言うと、ビニール袋に入った大玉のスイカを手渡してきた。
「えぇ！？　そんなものまで……どうもすみません。」
　母がペコペコと頭を下げるのを見て、僕もおずおずと頭を下げた。
「ああ、そうだ！　玄関で立ち話もなんですから、うちに寄って行きませんか？」

「良いんですか？　……ではお言葉に甘えて。」
　彼は足が悪いのか、右手で杖をつき、足を引きずりながら歩いていた。それに気づいた僕は迷わず声を掛けた。
「あの！　うちの玄関上がりづらくて……だから僕に掴まってください！」
　玉川は一瞬驚いた顔をしたあと、どこか昔を懐かしむような表情で微笑んだ。
「ありがとうございます。……君は優しいですね。」
　それから、母が切ってくれたスイカを食べながら色んな話をした。彼はとても物知りで、僕の知らないことをたくさん教えてくれた。すっかり彼の話に引き込まれた僕は、憂鬱な気持ちなんて忘れてしまう程に話に熱中して、気付けば夕方になっていた。
「今日は樹の相手をして下さり、本当にありがとうございました。少し上がってもらうつもりがこんな時間になっちゃって……。」
「いえ、私も楽しかったですよ。樹くん、荷物が片付いたら、是非うちにも遊びに来てください。いつでも待っています。」
「……！　はい！」
　玉川さんが隣に越してきてからというもの、僕の生活は一変した。夏休み中は毎日彼の家に転がり込み、学校が始まってからも、放課後になれば飛ぶように走って帰り、彼の家へと向かった。僕は、物知りな彼に敬意を込め、彼のことを「師匠」と呼ぶようになった。その呼び方も、僕が大きくなるにつれて気恥ずかしくなり元の通り「玉川さん」呼びに戻っていったのだが、玉川さん本人は「師匠」と呼んでいたときの方がなんだか嬉しそうだった。最初に会った時の印象が強いのか、夏に玉川さんの家に行けば、いつもスイカをご馳走してくれた。……実はそんなに好きでないのだが、それを伝える気にもなれず、黙っておいた。なんだか玉川さんが来てからは、時の流れがすごく早くなったように感じた。
　玉川さんが中心のような生活を送っていた僕だったが、そんな生活も、中学に上がれば少しずつ変わっていった。小学校から中学校に上がるにあたって変わったことといえば、小学生の頃、僕をいじめていた連中がいなくなったことだ。学校での息苦しい空気がなくなり、顔ぶれが新しくなったことで僕には友達ができた。
　そして、僕は野球部に入部した。結構きちんとした部だったこともあり、放課後も部活に明け暮れることとなった。初めての友達に部活、勉強と、忙しい毎日。こうして僕は少しずつ、玉川さんの家に通うことが少なくなっていった。
　それでも誕生日の日には、毎年顔を見せに行った。僕の誕生日は決まって夏休み中だということもあるし、ちょうど良い機会なのだ。
　僕はその日、十五歳になった。僕が幸せでいられるのは、あの日、僕の憂鬱を消し去ってくれた玉川さ

んのおかげだ。それを伝えたくなって、僕は足早に玉川さんの家に向かった。少し緊張しながらチャイムを押す。深く息を吐いて心を落ち着かせていると、コツコツと杖をつく音が近付いてくる。ゆっくりと扉が開き、見知った顔が現れた。

「おや、樹くん、なんだか久しぶりですね。しばらく見ない間にまた背が伸びましたか？　その調子だと私の身長を抜くのも時間の問題ですね。」

そう言って笑う玉川さんを見て、変わらないその姿に安堵した。

「今日で、十五歳になったんです。それで挨拶に来ました。」

「十五歳ですか……。そうか、君ももうそんな歳になったんですね。」

「はい！　僕が今もこうしていられるのは玉川さんのおかげですよ。本当に……そう思います。」

「君がそう言ってくれるのなら、報われますね。」

そう言った玉川さんの目は、どこか遠くを見ていた。

「ああ、そうだ。ちょうど今朝頂いたスイカがあります。今切りますね。適当に座って待っていてください。」

いつものスイカだ。僕は苦笑した。しばらくすると、綺麗に切ったスイカがテーブルの上に並んだ。彼はゆっくりと椅子に腰掛けると、こう言った。

「では、たまには私の身の上話でもしましょうか。今の君にならきっと……伝わるでしょうから。」

「身の上話……？」

今まで玉川さんには色んなことを教えてもらったけれど、そんな話を聞くのは初めてだった。驚いている僕に彼は言う。

「いつかは話そうと思っていました。……随分と遅くなってしまいましたね。」

その声色は先ほどと打って変わって暗く、沈んでいて、淋しげに目を細める彼の姿は、僕を不安にさせた。

「私はね、樹くん。君と似たような環境で育ったんですよ。」

「え……？」

まじまじと彼の顔を見た。

「ふふ、意外でしたか？」

僕はただ、静かに頷いた。

「私の父は、酒癖の悪い人でした。酒を飲むと、人を殴るようになるんです。父が酒を飲む度、母はいつも殴られて、それでも私を育てる為、母はずっと耐えてきた。そんな生活が変わったのは、私が五歳の頃でした。仕事から帰った父は酒を飲んでいて、母は生まれたばかりの赤ん坊を抱えて、ミルクを飲ませていました。赤ん坊に母を取られて拗ねていた私は、気まぐれに父の元へと近づいて行きました。私に構ってくれない母への、ちょっとした当てつけのつもりだったんです。でもそれが悪手だった。無邪気に父にじゃれついた私を父は怒鳴り付けました。それだけでは治まらず、幼い私を殴ったんです。今まで母を殴ることはあっても、私にまで手を上げることはなかった父が、初めて私に手を上げた。それからしばらくは、何が起こったのか分かりませんでした。呆然と立ち尽くしている私を現実に引き戻したのは母の罵声でした。母があんなに怒っているのを見たのは、後にも先にもあの一回だけでした。父に殴られたのだ、とようやっと理解した私はわんわんと泣いて、泣いて、そうしている内に私の声とは別の、もう一つの泣き声が聞こえることに気付いたんです。……その声の主は、先ほどまで母にミルクをもらっていた赤ん坊でした。私はそっと近づくと、潤んだ目で赤ん坊を見つめました。すると赤ん坊はピタリと泣き止んで、私と同じ、潤んだ目で見つめ返してきました。心が通じあった気がした。この子が僕の妹なのかと、初めて実感が湧きました。

……その夜、母は私と妹を連れて家を出ました。行く当てはありません。ただ、家から遠く、父に見つからないように、家族三人、伸び伸びと暮らせるような、そんな場所を求めて辿り着いたのが、ここだったんです。」

息を呑む。

「それじゃあ、玉川さんが育った場所って……」

「ええ、この村です。今私が住んでいるこの家は、母と妹が暮らしていた家でもあるんですよ。」

驚くことばかりだった。玉川さんも僕と同じ「余所者」だったのか。

「君も私と同じ。余所者がここでどのように扱われるか、よく知っているはずです。

……ここは、私達家族を歓迎してはくれませんでした。陰口を言われたり、茂みから石を投げられたり、散々でした。周りに誰も味方はいません。だから私達家族は、何をされても我慢してきました。……でも、それは終わりのない戦いでした。我慢しても、状況は悪化する一方で、私が中学に上がる頃になっても、それは変わりませんでした。

ある時、放課後の教室でいつも通り殴られていた時です。私を殴っていた少年の取り巻きが、私に言ったんです。〝お前の母親も妹も、生きる価値のない軟弱者だ〟と。カッとするというのはまさにああいうことを言うんでしょうね。私はそいつの胸ぐらを掴むと、我を忘れてひたすら殴りました。何度も。何度も。気が付いたら、私をいじめていた生徒たちが、怯えるような目でこちらを見ていました。そして私の足元には、アザだらけの顔で許しを乞う取り巻きがいました。私はこのとき思ったんです。〝なんだ、こうすればよかったのか〟と。

それからというもの、私は学校にも行かず、朝から晩まで喧嘩に明け暮れる日々を送りました。肉体的に強くなれば、弱い自分と向き合わずに済む。私を取り巻く環境、守れなかった大切な家族、その全てを忘れるために私は人を殴りました。

そして十五歳になった時、私は一人で村を出ること

を決めました。もう、とうに限界を超えていたんです。これ以上ここに留まり続ければ死んでしまうとすら思いました。母と妹には、何も告げませんでした。二人を残して村を出ることは、決して許されないことだった。そんな罪の意識があったからこそ、とても行ってきますなどとは言えなかったんです。」

彼は苦しそうな声でそう言うと、目を伏せて、自分の手を見つめた。

「後悔……しているんですか？」

「そうかもしれません。でも、もし過去に戻れたとしても、私は同じ選択をすると思います。……ああするしか、なかったんです。」

絞り出した声には、後悔が滲んでいた。

「それから私は、東京に出て、小さなアパートで暮らし始めました。それでもやることと言えば喧嘩ばかりで、喧嘩で人を殴っては、小遣い稼ぎをしていました。それ以外の生きる術を知らなかったんです。あっという間に月日だけが流れていきました。二十歳を過ぎても私の生き方は変わらず、町を歩いては挑んでくる相手を返り討ちにして、村から出たって私の孤独は変わらない。そんな時、私はある男に出会いました。その男は大柄でガタイが良く、大層喧嘩の腕に自信があるようでした。結果私はその男に勝ったのですが、いつもと違ったのはその後でした。その男は私に〝弟子にさせてくれ〟と頼んできたんです。そんなことを言われるのは初めてでした。結局私はその男を弟子にすることにしました。といっても彼は私より十も二十も年上でしたから、なかなか慣れませんでしたが。彼は私に自分の仲間を紹介してくれました。世間的に決して良い関係と言えるような仲間ではありませんでしたが、生まれて初めて私に居場所ができたんです。家がボロアパートだって構いません。小さなテーブルで肩を寄せあってスイカを食べるのが私の幸福だったんです。彼は決して立派な大人とは言えませんでした。いい年して何十歳も年下の青年に喧嘩を挑むような、負けたら今度は弟子にしてくれとへり下るような、端から見ればただのチンピラなんだと思います。それでも……私にとっては、生涯でたった一人の、友人だったんです。」

玉川さんの目が潤んでいた。

「地元では、誰もが私を、私の母や妹を邪険に扱っていました。誰一人として手を差しのべてくれた人はいなかった。でも彼は違った。曲がりなりにも、私にあたたかい居場所をくれました。私が足を悪くしてからも、ずっと支えてくれた。……彼は、オカダと名乗っていました。本名なのかすら、分からず仕舞いでしたが。」

「オカダ……僕と同じ。」

「ええ……君の家に挨拶に行ったときには驚きました。懐かしい名前だったものですから。」

玉川さんはそう言うとからりと笑った。

「オカダさんは今、どうしているんですか？」

「……彼ならとうに死にました。元々、恨まれるような事ばかりやっていたようですから。もう十何年も前の話です。」

静かな口調だった。口ぶりからして刺されて死んだのだろうか。

「母と妹に会ったのも、私が村にいたときが最後でした。その後はどうしているのか……私はなにも知りません。知る資格もないと思っています。」

そう言うと玉川さんは空を仰いだ。その顔を見れば、今も家族を想い続けていることがすぐに分かる。僕はなんと言えばいいのかわからず、ただ静かに、彼の次の言葉を待った。

「君は……真っ直ぐ育ちましたね。同じような境遇で育ってもこんなに違うなんて、不思議です。」

僕を見る玉川さんは、まるで、僕と同じ年頃の少年のように見えた。

「君は私とは違う。自信を持ってください。きっとこれからも幸せな人生を歩んでいけます。」

そう言ってまた、笑う。だがその笑顔の裏にはきっと、今も埋まることの無い孤独と、死ぬまで癒えることの無い深い傷が隠されているのだろう。

「……つまらない長話に付き合わせてしまいました。スイカは……必要ありませんでしたね。」

テーブルの上には、ぬるくなったスイカが鎮座していた。話に夢中ですっかり忘れていた。

「このスイカは君が持ち帰ってください。お母さんや、……お友達と一緒に食べるといいでしょう。」

切ったスイカを皿に乗せ、丁寧にラップをかけるその背中が妙に小さく見えた。敬愛する恩師の昔話は、当時の僕にはあまりにも現実味がなく、誰よりも優しい彼がそんな人生を送ってきたなんて、どうしても信じられなかった。いっそ全てが作り話だと、そう言っていつものように笑いかけてくれたなら。目の前の景色が遠ざかっていった。それからの記憶はどうにも曖昧だ。気づけば僕は玉川さんの家の玄関に立っていて、綺麗に切り揃えられたスイカが乗った皿を持って、家から送り出されていた。全てがいつも通りだった。玉川さんは、不自由な足でわざわざ玄関先まで出ると、「では、また。」と言って見送ってくれた。長く伸びた影と共に、何度も手を振ってくれた。心にわだかまりを残したまま、僕は帰路についた。

その夜、僕はなかなか寝付けず、天井と見つめ合っていた。あんな話を聞いたのだ。当然だ。しかしそれとは別に僕は妙な胸騒ぎがしていた。何か大切なものが指の隙間から零れ落ちたかのような不安が、頭から離れなかった。

僕の予感は的中した。

次の日、僕は、玉川さんの家に行きチャイムを鳴らした。……しかし、何度チャイムを鳴らしても、彼が姿を見せることはなかった。夏の灼け付くような日差しを背に、僕はただ呆然と立ち尽くした。今年一番の猛暑だと、今朝のニュースで大きく取り上げられてい

たというのに。僕の手は冷たく、体は凍ったかのように固まって、その場から離れられなかった。蝉の声が遠かった。行き場のない悲しみに声も出ず、少し遅れて涙だけが静かに頬を伝った。

僕の恩師はある日突然、風のように姿を消したのだ。

「樹？　あれ？　どこ行ったの～？」

母の声で、僕は現実へと引き戻された。僕の目の前には、寂れた古い家と、「玉川」の表札だけが物悲しくそこにあった。玉川さんがいなくなって、もう十年も経つ。時の流れは早い。

なぜ、玉川さんはいなくなったのか。十年経った今も僕には分からない。けれど、大人になった今だからこそ分かることもある。玉川さんは僕のことを「同じような境遇だったのに、真っ直ぐ育った」と言った。でも、それは違う。僕にはあなたがいたのだから。僕が「真っ直ぐ育った」のなら、それは間違いなく玉川さんのおかげだろう。もし僕が玉川さんと出会っていなかったのなら、もしかすると僕も彼のようになっていたかもしれない。誰も味方がいない、孤独を抱え生きていた少年時代の玉川さんのことを想う。彼はきっと、生きるために強くなろうとしたのだ。けれど彼は優しすぎたから、限界まで耐えてしまった。自分の心を守るために振るった拳はあまりにも悲しい。優しい彼が、そのやわらかな心のまま生きていくことができれば。だが、今になってしまえばどうしようもない。やはり彼はその心を石に変えなければ生きていけなかったのだろう。それが彼の生き様だったのだ。もしも。もしも僕が彼の友人になれていたのなら。どんなに良かったか。一緒に笑って、たまにはケンカして、一人ぼっち同士結構仲良くなれたかもしれない。

そんなことを考えた僕を、誰かが呼んだ気がした。振り返れば、哀れな少年の幻影が、優しく僕に微笑んでいた。

【優秀賞　俳句部門　受賞】

星槎国際郡山
二年　鈴木　果凛

飛んでいく　むぎわら帽と　恋心

【審査員特別賞　エッセイ部門　受賞】

「私の背中を押した言葉」

星槎国際福井
二年　小林　侑奈

誰にでも劣等感は生まれるものである。

お兄ちゃんの方が頭がいい！　SNSは私より可愛い子ばっかりだ！

人は誰かと比べてでしか生きていけないのだ。誰かと比較することで人間は引け目を感じてしまいます、自分の為にやめてください。そんなの無理です！　なんなら自分の為に比較しちゃう時もあります！　多分みんなもしています！　私自身、病気により全日制の高校を留年、退学、18歳でもう1度高校2年生をしている。全日制時代の友達から塾や模試の結果、大学の話を聞く度にそれはそれは焦る。文化祭の準備や卒業まで何日なんて焦りまくる。劣等感とは焦りの根源である。友達より何歩も遅れている。私は何も出来ない。何も達成出来ない。新しいことをするのは怖い。ただ自分の思うがまま寝て、鼻をほじる日々。自分というものは否定する存在になっていたのかもしれない。そんな廃人と化した私に、母はこう言ってくれた。〝色々な経験を得てからこそ色々な人と出会い、色々な優しさを理解し、自分を成長させられる〟私が転学先の学校も決まらず、眠れず、何も出来ない私に、優しくこう言ってくれた。母は私が出会った人の中で1番心の優しい人である。なのですぐ腑に落ちた。そして泣きそうになった。私はこれまで、何をするにも2つ先のハードルを飛び越えようと必死だった。しかしそんなの良く考えれば無理な話だ。凄く凄く小さなハードルを何個も飛び越えればいいと思った。遠回りした方が道に詳しくなるのだ。友達は友達の迷い抜いた末の人生を送っている。それは簡単には比べられないなあ、と、そう思えるようになった。私はこれからも誰かと比較する癖は簡単にはなおらないだろうけど、今は、自分は何がカッコよくて、何になりたくて、何が楽しいのか。誰かとそんな話が出来ればそれで十分だ。自分の思い描いていた未来は何一つ叶っていないけど、まずはこの宿題を期限までに出すというハードルを飛び越えてみようと思う。

「無題」
町田　夏波（星槎国際立川2年）

【星槎大学長賞　小論文部門　受賞】

「環境保護のために
私たちができること」

星槎国際郡山
二年　米澤　悠璃

地球は私たちの唯一の住まいであり、自然の恵みによって私たちの生命を支えています。地球環境が崩壊すれば、食糧がなくなり、住む場所もなくなり、争いが起きることが目に見えています。しかし、現代社会における経済成長と技術の進歩は、地球環境への負荷を増大させています。環境問題は私たち全員が共有する課題であり、地球の緑を守るためには、私たちの意識と行動の改善が重要です。本稿では、地球の緑を守るために必要なアプローチを四つの観点から考えます。

まず第一に、持続可能なエネルギー源への移行が必要不可欠です。電力を生み出すために必要な化石燃料の使用は、二酸化炭素の排出は地球温暖化を引き起こし、気候変動が深刻化しています。しかし、私たちの生活にとって、電力はなくてはならない存在です。自分自身の生活を顧みると、スマホにパソコン、テレビ、照明、時計など、電気なしでは生活が成り立たないほど、電化製品に囲まれて生きています。そのため、電気そのものの使用をすぐに辞めることはできません。太陽光、風力、水力などの再生可能エネルギーの利用は、環境に優しい選択肢です。では、なぜそれらのエネルギー源はまだ中心的ではないのでしょうか。それは設備のための材料やお金、労力などのコストが掛かることが大きな理由として考えられます。そのため、政府や企業は再生可能エネルギーへの投資を促進し、地球温暖化の防止に向けた積極的な取り組みを行う必要があります。一般市民は、使用電力の節約をするとともに、再生可能エネルギーへの関心を高め、積極的にそれらを選択していくことが大切だと考えられます。

第二に、森などの自然保護と生態系の回復が重要です。伐採などによる森林の破壊は、森にすむ生き物たちの食糧と住まいを奪います。それにより、住む場所を失った動物たちが人里に降りて来ることで、農作物に被害を与えるなどの状況が起きています。他にも、植物は二酸化炭素を吸収する役割があり、森林が減少すると地球温暖化が加速します。人間は木材や燃料として利用するため、そして土地を開拓するために伐採を行います。しかし、このような状況を続けていれば、地球は住むことが難しい場所になってしまいます。緑を守るためには、国際的な協力による自然保護地域の設定や、持続的な森林管理が必要です。また、人間の活動により破壊された生態系の回復にも取り組むべきであり、植林活動や野生動物の保護など、具体的なプロジェクトが重要です。私も、ボランティアなどとして参加したいと考えます。

第三に、持続的な生活スタイルを多くの人ができるようにすることです。エネルギーや木材をはじめ、私たちの消費行動は地球に直接的な影響を与えています。廃棄物の削減、リサイクルの促進、エネルギーの節約など、地球の緑を守るための生活スタイルへの転換が必要です。一人ひとりの小さな努力が、地球全体の環境保護につながることを忘れてはなりません。日々、無駄な電気を消す、ごみの分別をするといった、小さな行動を積極的にすることが重要だと思います。

最後に、教育と意識の向上が欠かせません。環境問題についての正確な情報を収集し、環境への理解と責任を一人一人がもつことが重要です。学校教育やメディアを通じて環境保護に関する活動を行い、地球の緑を守るための共通の価値観をつくることが求められます。私たち高校生はエネルギー節約やリサイクルを実践し、環境意識を高めることが大切です。チラシやWebサイトを作成したり、SNSを活用することも高校生にできることとして考えられます。

地球の緑を守るためには、個人の意識改革と共に、政府や企業、国際社会の協力が不可欠です。環境問題は一国や一地域だけでは解決できない問題であり、地球規模での協力と行動が求められます。私たち一人ひとりが環境を大切にし、地球の緑を守る使命を果たすことで、未来の世代に美しい地球を引き継ぐことができるでしょう。私一人の力では、大きなことはできませんが、同じ地球に住む仲間たちと力を合わせ、私たちの唯一の住みかである緑の地球を守りましょう。

【星槎道都大学長賞　小説部門　受賞】

「諦観した子ども」

星槎国際北広島
三年　正木　ひな

四月。桜が舞う季節。

物心がつく頃には既に、私は自身の人生を諦観していた。

一、

私はもうすぐ十五になる。とは言え、残念ながら普通の学生のような生活はできていない。

私は生まれた時から心臓が弱く、この十五年間の人生殆どを病室で過ごしてきた。四方の白い壁に囲まれた殺風景な部屋で、心臓を動かす機械に繋がれた管を常に付けていなければ、すぐにでも心臓が止まって

しまうような弱々しい体だった。お陰で学校にも一度だって行ったことは無かったし、自由に外に出ることすらも許されなかった。
唯一外に出られる機会と言えば、検査をする為に大きな病院に移動する時だけだった。

二、

十歳の頃に一度、そんな無味乾燥な生活にうんざりとし、自身に繋がれている何本もの管をすべて無理やり薙ぎ払って、夜中に病室を抜け出したことがあった。
「私はこんなものに頼らなくたって生きていける！」
という妙な自信もあってからの行動だった。

だが、思っていたことに反して、現実は違ったようだった。病室から抜け出した最初こそ良かったものの、すぐに息苦しくなり、意識が遠のき始め、そのまま意識を失ってしまった。目が覚め、気が付いた時には酸素マスクが付けられた状態でベッドに横たわっていた。
倒れた直後、おそらく監視カメラか何かで廊下の様子を見ていたのだろう看護師がすぐに駆け付け、なんとか一命を取り留めたらしい
沢山の人に迷惑をかけた過去の自分を擁護する訳では無いが、きっと無理も無かったのだろう。だって、管が無い生活を少しだって知らずに生きてきたのだから。それがあの妙な自信の根本でもあったのだろう。

この出来事は、幼かった私に
「私は一生、これに頼らなければ生きていけないのだ。」
とはっきり認識させるには、十分すぎるほどの出来事だった。

その頃からだった、「必ず治る」という看護師と医師の言葉を信じられなくなってしまったのは。自身の人生を悲観し始めたのは。
だってよく考えてもみればいい。産まれた時から抱えているこの障害が、十年かけても回復の兆しが全くなかったこの障害が、ある日突然魔法がかかったかのように完治するだなんてことはあり得ないのだ。

三、

私はいつか、みんなのように小学校に通って、みんなと同じように外で遊んでみたいと思っていた。というか、いつかは必ずそのようにできると思っていた。その「いつか来るはずの将来」の為に勉強だって色々していた。

例えば、国語や算数、理科や社会。治った時にみんなのやっている授業についていけなかったら大変だから。
例えば、最近の時事や流行りもの。同い年のクラスメイトの話題についていけなかったら大変だから。

私は未来のことを考えながら学びを進めることが大好きだった。今学んでいることが生かされる日々を想像した時には胸が躍った。だが、あの出来事から程なくして、気が付いた時には私は一切の学びをやめていた。

四、

私には友人や味方はおろか、親もいなかった。
私が生まれて間もない時に、病院に入院している私を残し、荷物をまとめて夜逃げをしたのだそうだ。金銭的にもそこまで余裕がなかったらしい私の両親は、医師から私の状態を聞いた際に育てることはできないと判断したのだろうと思う。
親にも見捨てられ、友人も病気の治る見込みも無し。こうなったらもういいよいよ、学びを進めようと自身を掻き立てるような事柄を探すことの方が難しくなってくる。だって、味方もいないのに、誰が学びをしたことを認めてくれるというのだ。未来は無いのに、学んだ先に何があるというのだ。

四角い箱内で寝ているだけの生活に、知識や教養は必要無い。

五、

夏、私は昨日十五の誕生日を迎えた。
年を重ねても意味が無いことは分かっているが、これぱっかりは自分ではどうしようも出来ない。
そんなことを考えていた時に、医師が突然、酷く慌てた様子で私の部屋に駆け込んできた。どうしてそんなにも慌てているのかと聞く私を無視して、医師はほかの病室にも響くくらいの大声でこう言った。
「君の病気は治ったも同然だ！」
私は、走ってきたが故に、息がハァハァと上がっている医師を眺めながら、困惑を隠せず顔を顰めた。
……何を言っているんだこの人は。つい三日前に心臓の検査をしたばかりで、皮肉なことに何も変わりは無かったじゃないか。顰めた表情でそう考えていたら、医師はまるで思考でも読んだかのように、一呼吸を置いたのちこう続けた。
「外国で〈ペースメーカー〉というものが開発されたそうだ！　きっともうすぐ本国でも承認されるだろう！」
医師が言うには、その〈ペースメーカー〉とやらは、今私が、管を介して繋がっている機械の代わりとなるものらしい。更にそれはとても小さく軽いため、身体の中に入れたまま普通の生活が出来るという優れモノなのだとか。
「これは革命だぞ！　医療の常識が大きく変わる！」
と医師はとても嬉しそうに言い、更にこう続けた。
「本国での承認申請はもう出ているそうだ、このまま承認が上手くいけば、早くて六か月後、遅くとも十か月後には手術ができるぞ！」

本当によかったなと医師は私に笑いかけた。
その後すぐに看護師から医師のもとに呼び出しの電話が入ったため、医師は少し申し訳なさそうにしながら病室を出ていった。
電撃のような一瞬の騒々しさは止み、私はまた静かな病室に一人取り残された。
……さぁ！　ほら、やっとだ！　やっと外に出てみんなと同じような普通の生活ができる！　やっと、長年願っていたことが叶う！　まさに青天の霹靂だ！　なぁ！　そうだとは思わないか！
……ああ、そう思うさ。本当に。
だが、私は嬉しさというものを感じることは出来なかった。むしろ感じたのは、『恐怖』という感情の方だったのだ。

六、

十歳の時、私は学びをやめた。
私には友や家族という味方も居ず、未来も何も無いと思っていたから。
だがそれは大きな間違いだった。
何も無いからこそ学ぶべきだったのだ。
ただ『自分が知らなかっただけ』のことを、『自分には無いもの』だと自身で勝手に決めつけていただけの話だった。
『本を読まなかったから、希望の持ち方を知らなかっただけ』
『新聞を読まなかったから、目を見張るほどの医療の発展速度に気が付くことが出来なかっただけ』
『人と話そうとしなかったから、一番近くの明確な味方に気が付くことが出来なかっただけ』
すべて自分から遠ざけただけでは無いか。
味方がいない？　冗談じゃない。
あの時、ほかの病人に迷惑なくらい騒々しく、嬉しそうに息を切らしながら私のところへ〈ペースメーカー〉の事を伝えに来てくれたような医師が、お前の味方じゃないと誰が思おうか。
私の諦めきった顔を見ても「必ず治る」と毎日毎日めげずに励ましてくれる看護師たちが、お前の味方じゃないと誰が思おうか。
親と友人だけが味方の形じゃないと気が付けなかったのも、すべて学ばなかったからだ。
結局私は、なるべく自分が傷つかないよう、病気に託けて学ばない理由を探し、正当化していただけだったのだ。

七、

私は今、いつも検査をしている大きな病院に向かっている。今日は待ちに待った手術の日だ。
私は気づきを得たあの日から今まで、自分なりに学びを始めていた。
お医者さんや看護師さんに話しかけてみた。
本を借りてみた。
新聞を持ってきてもらった。
裁縫道具を借りてみた。
文房具を借りてみた。
以前の自分とは比べ物にならないくらい、物事に意欲的になった。
本や新聞を読み、裁縫や描画をした。
学びに付随して発見できたことも沢山あった。
私はどうやら絵が得意らしく、この間看護師さんにも褒められた。今度絵画コンクールに出してみたらどうかと言われた程だった。私は新たな自分を見つけられたような気がして、心底嬉しかった。
学ぶことは、人間にとって最大の生きる術であるというのに、それを生かさず生活しようとするだなんて、甚だおかしな話だったのだ。
手術が始まるまでの残り数十分。私は病室で少し本を読んでいることにした。時間を少しだって有効に使いたいのだ。今まで失った時間の分も。
今日読む本は『アルベルト・アインシュタイン』の本だ。一頁目をめくり、さっそく読み始める。
……ははっ。
『学ぶことをやめた時、それは死の始まりである』
――アルベルト・アインシュタイン――
……ああ。本当に、全くその通りだ。
「春崎さん。お時間ですのでご準備お願い致します。手術、どうか頑張ってくださいね。」
看護師さんが、病室で待機している私の名前を呼んだ。
「わかりました。ありがとうございます。ええ、頑張ります。」
三月、病室から見える桜の木が蕾をつけていた。まさに今、春は生きているのだ。

【部門賞　小説部門　受賞】

「幻想郷の九尾」

星槎国際北広島
三年　前田　礼

黒く淀んだ冷たい水中。沈んでいくのは体と孤独に満ちた心。だが、恐怖心が湧かなかったのは、側に君がいたからだろう。水中で揺らめく狐面は何故か、暖かく感じた。

ピーピ、ピーピ、ピーピ、ピーピ……。遠くで目覚ましの音が聞こえる。

「今、何時……？」

スマホの画面を見ると、とっくに家を出る時間が過ぎていた。

「ヤバい！　今日ばかりはヤバいって！」

それまでだらけていた体を跳ね起こし、登校の準備をした。身なりを整え、昼食の菓子パンを無理矢理鞄に詰め込み、扉の鍵を閉めて走り出した。

「終業式に遅刻なんて、絶対に目立つ。」

そう、今日は終業式。遅刻常習犯である私、桜庭涼は蝉の声をよそに学校へ向かった。

「ハァー。な、何とか、間に合った。」

呼吸を整えながら窓側の自分の席に着く。学校までダッシュしたおかげで汗だくである。

「あーれー？　珍しく遅刻じゃないとは、何、今日雪降るの？」

「今日まで遅刻したら、山村に怒られる。朝一ダッシュ決めてきたんだよ。」

「あー、なるほどね。お疲れさん。」

隣の席の松岡麻里は私の話をよそにSNSを見ている。麻里は、小学生からの幼馴染みでスタイル抜群メイクバッチリの、いわゆる一軍女子である。私は彼女とは正反対のショートボブで、男子に見間違われる程の女子高生だ。幼馴染み同士で、クラスで話すのは麻里だけである。口下手なため、友達も麻里だけだ。

「流石の山村もお怒りになるわな。」

「ちょいちょい、予鈴前にいるでしょうが。」

そんな会話をしていたら、予鈴と共に担任の山村センセイが出席名簿を小脇に抱えて教室に入ってきた。

「きりーつ。」

ガタガタと音を立てながら椅子を机に入れた。窓の外に目をやると、晴れ渡った空に一羽の鳥が飛んでいるのが見えた。

終業式が終わった昼休み、朝詰め込んだ菓子パンを食べながらスマホを見ていた。明日からは夏休み。と言っても、私は毎年決まって行く場所がある。

「涼、夏休みのどっかでさ、みんなで海に行こうよ。」

「ごめんパス。じいちゃん家行くから。それに、人多いとこ苦手だし。」

人混みは苦手だ。そう思いながら菓子パンを頬張る。あ、これ美味しい。

「でたー、今年もそれですか。高校生最後の夏休みくらい付き合ってよ。じいちゃん家に行くとか言って、また神社巡りするんでしょ？」

そう、私は毎年夏休みには神社巡りをすると決めている。趣味で行くものなので麻里も誘わず一人旅するのだ。

「本当に好きだよね。まぁ、昔から変わらないか。小さい時も近所の神社に通ってたよね。」

「悪いね、一緒に行けなくて。でも、じいちゃん家に行くのは本当だよ。何が何でも行かなくては。そう、今年は特に。」

私が熱弁している横で、麻里はニヤニヤしていた。

「……何？」

怪訝そうな顔しながら菓子パンを一口食べる。

「いや、張り切る理由がよく分かったわ。稲荷神社に行くんでしょ。」

突然の図星発言で、菓子パンが喉に詰まるところだった。

「はあ？　なんで分かったの。確かにそうだけど、稲荷神社があるなんて言ってないよね？」

「いやいや、涼のそのテンション、絶対そうだと思ったわ。テンション爆上げーみたいな、目輝いてるし。」

「そんなに顔に出てた？」

悶々としながら菓子パンを口に放り込む。

「出てたよ。それに狐好きでしょう涼。昔も今も狐のお守りずっと持ってるしね。」

鞄のファスナーの狐面のお守りが揺れる。白くて桜の模様があしらわれた物だ。小さい頃にじいちゃんに貰った物で、常に持ち歩いている。というか、麻里がこれをずっと持っていたことに気づいていたなんて。幼馴染みとは恐ろしい。

「それにいろいろあったしね……。」

「……。」

いろいろ。確かにあまり良い記憶じゃない。あの日の事はしばらく考えないようにしていた。教室中のざわめきが嫌によく聞こえる。暗くて重い記憶が私を飲み込む。

「あ、えーっと、ともかく一人旅楽しんで来なよ。涼の代わりに青春してくるからさ。」

重々しい空気は麻里の一言と背中に受けた平手で消え去った。彼女なりに気を遣ってくれたのだろう。

「痛っ。手加減って知ってます？　麻里さん。」

「ごめんごめん」

そう言いつつもバシバシ背中を叩いてくる。彼女のそんな所は嫌いじゃ無い。他愛も無い会話をしていたら予鈴が鳴った。生徒達が授業の準備をし始める。

「稲荷神社、楽しんで来なよ。」

どこかぎこちなく、麻里が言った。私は麻里の背中を叩き、

「言われなくても。」

と、笑いかけた。明日からの夏休みで、教室中が浮かれている。晴れ渡った空にはやっぱり、一羽の鳥が飛んでいた。
「やめときなよ、呪われる。」
「九尾って、マジで言ってんの？」
　周りの視線が針のように刺さっていく。所詮は存在しない生物に憧れるなど馬鹿げた話だろう。そんなことは、私が一番よく知っている。
「何それ、狐面？　厨二かよ。」
「か、返してください。」
「未だに妖怪信じてるとか、キモすぎ。」
　中学の時、私のお守りを見て男子がからかってくることがよくあった。厨二臭い、呪われる、ありとあらゆることを言われた。私が一番よく分かっている。馬鹿げた話だと。でも、「会いたい」と思うことすら、いけないことなのだろうか。
　日中の暑さが和らぐ夕暮れ時。とは言え、大量の教科書が入った鞄と暑さで今にも倒れそうだ。部活終わりというのもあり、さらに疲れが増していた。
「暑い。荷物重いし、部長には止められるし、これ無事に家に帰れるんだか。」
　吹奏楽部に所属している私は、急遽部長に学校祭での課題曲を練習するようにと言われた。耳は昔から良い方で、絶対音感と言うやつらしい。ちなみに、楽譜は読めない。よくも読めずに部活をしているもんだと自分でも思う。部長の頼みを断れるはずもなく渋々了承した。
「課題曲か。まあ、練習あるのみですな。」
　ふと空を見上げた。茜色に染まる空はいつ見ても綺麗で、少し冷たい風が頬をなでる。
「今日はなんだか慌ただしい一日だった気がするな。」
　そんな当たり障りのない独り言を零したときだった。
チリーン
　夕日が静かに沈んでいく中で、鈴の音が聞こえた。疲れているし、幻聴かと思っていたが、段々その音が大きくなっていくのが分かった。
チリーン、チリーン、チリーン
「どこから鳴っているの。」
　音の鳴る方へ近づいていった。すると、茂みから白い狐が飛び出してきた。
「わああって、え？」
　紅色の瞳で真っ白な毛並み。小型犬ほどの大きさで、首元には小さな鈴が揺れている。黒い狐がいるのは聞いたことはあったけれど、白い狐だなんてじいちゃんの家にあった絵巻物でしか見たことがない。
「犬、じゃないよね。だったらあんた何者なのよ。」
　明らかに浮世離れしているその姿から、目を離すことなど出来なかった。何故なら、今私が考えている事が的中したのではないかと、期待していたからだ。胸が高鳴っていく。そして、思わずその言葉が口をついて出た。

「あんた、妖狐なの？」
　それを聞いた瞬間、ピクッと狐の耳が立った。そして次の瞬間、私を背にして山の方へ逃げてしまった。二本の尻尾を揺らしながら駆けていく。
「待って！」
　私は急いで白い狐を追った。私の考えが確信に変わったのだから追わずにはいられない。今を逃せば今後絶対に会えないと、憧れていたこの世ならざる存在に会えなくなると、本気で思ったから。日が落ちて周りは薄暗い。普段なら怖くて進めない森の中。そんなことなど気にならないほどに、夢中になって追いかけた。だが、素早い動きについて行けず見失ってしまった。
「嘘、全然追いつけない。て言うか、ここ何処？」
　当たりは真っ暗で、当然あの白い狐もいない。夜風が木々の間を通ってゆく。
「……、迷子だ。今になって怖くなって来たんだけど。」
　周りの木々が噂話をしてるかのようにざわめいている。あまりの恐怖にお守りを握りしめた。来た道を戻ろうと思ったが、何処を通ってきたのか分からない。とにかく、山頂を目指すことにした。このまま彷徨い続けても帰れる気がしないし、上に行けば神社があると聞いたことがあった気がした。曖昧な情報だが、藁にもすがる思いで山を登った。
「我ながら阿呆なことしてるな。やっぱり疲れてるのかな。あの狐は幻覚だったのかもしれない。」
　やはり妖怪など存在しないのだ。どこかでは分かっていたはずなのに、子供のように追いかけて行ってしまった事を、今更後悔している。これが本当の、「狐につままれる」というやつだろう。背負っている鞄がさらに重く感じた。山頂に向かっていると、古びた鳥居が見えた。鳥居は山頂にむかって連なっていて、そして不思議なことに灯籠に火が灯っている。
「火が灯ってる。お祭りでもあるのかな。」
　もう足が棒になりそうだ。早く休める場所へいこう。その思いでいっぱいだった。連なる鳥居をくぐり抜け、ようやく山頂に着いた。だがそこには、想像もしていなかった景色が広がっていたのだ。
「わぁ～、綺麗。」
　ピンク色の花びらが舞い落ちる。そこには沢山の桜の木があり、どの木も満開なのであった。
　月に照らされた、見事な夜桜だ。その木々の奥には綺麗な神社の本殿があった。だが、今は真夏。こんなにも桜が咲いているなどあり得るのだろうか。しばらく見惚れていたが、すぅっと我に返った。
「こんな季節に桜なんて……。」
　先ほどまで見惚れていた夜桜が少し不気味に見える。そういえば、来る途中の鳥居は古びていたのに、本殿は比べものにならないほど美しい。
「おかしい。」
　山頂に来た瞬間、別の世界にたどり着いてしまったかのような感覚だった。

「こんばんは、お嬢さん。」
本殿の方から一人の男性が歩いてくる。見た目は、大学生くらいの風貌だが青い袴を着ていて何より、瞳が紅く銀髪は長かった。さっきまで追いかけていた白い狐を彷彿とさせるような姿だった。
「こんな時間にお客さんが来るなんて、今日は良い日ですね。」
「こんばんは。その、道に迷ってしまって……。」
この人は、本当に人なのだろうか。今の時代、髪色や目の色など多様な社会だが、こんな時間にこんな山奥で遭遇するなんてことはあり得るのだろうか。夜桜と相まって、この世の人ではないのではないかと思った。
「おや、そうでしたか。それはお気の毒に。」
「山の麓までの道を教えてくれませんか。」
そうだ、早く帰ろう。綺麗だけど、こんな異質な場所、早く離れた方が良い。ここに長居したら、本当に、「元の世界に帰れなくなってしまう、ですか。」
「……、え。」
夜風が吹き、桜がよりいっそう舞い落ちてゆく。とても、ゆっくりと。時間が止ったかの様に。動揺を隠すことなど出来ない。今、心を読まれたのだ。目の前にいるこの世のものではないヒトに。
「お嬢さんの考えている通り、もうあなたは元の世界へは戻れませんよ。」
後ろを振り返ると来た道が無くなっていた。踏み入ってしまったのだ。異世界に。
「ここは幻想郷。人ならざる妖怪たちが住む世界です。自己紹介がまだでしたね。私の名前は裕太郎、お察しの通り妖狐ですよ。どうぞよろしくお願いしますね、桜庭涼さん。」
「幻想郷、妖狐。て言うか何で私の名前。」
目の前の状況に頭が追いつかない。憧れていた妖狐も、今となっては恐怖でしか無いのだ。頭がクラクラする。
「帰れ、ない……?」
「おやおや、混乱しているのですね。まぁ、無理もないでしょう。」
ゆっくりと、裕太郎が歩み寄ってくる。風になびく銀髪はとても美しい。恐怖をおぼえる程に。怖い、怖い。あのお守りを握りしめ、元々あったはずの帰り道の方へ駆けだした。逃げなくては。何をされるか分かったもんじゃない。脇目も振らずに走った。必死に、必死に走った。だが、妖狐に勝てるはずも無く、あっさり回り込まれてしまった。
「そんなに怯えないで、落ち着いて。」
そして、裕太郎に優しく抱きしめられた。なんだか甘い香りがして、眠くなってきた。
「今日は私の家でゆっくりお休み。」
遠のく意識の中でそんな声が聞こえた。やっと、会えたのに。何故怖いと思ってしまったのだろう。私は妖狐の腕の中で眠りについてしまった。

「涼、手を出してごらん。」
「わぁ、小さな狐さんだ！」
ころんと、私の手のひらに渡してくれた。
「これは、じいちゃんの友達が大事に作ってくれたんだよ。」
「え、いいの？　じいちゃんの大切な物だよね。」
「そうだね。でも、これは涼のために作ってくれって、じいちゃんが頼んだんだ。だから、お守りとして持っておくといいよ。」
じいちゃんが頭をなでながら笑いかけた。温かくて大きい、じいちゃんの手。
「ありがとう、じいちゃん。」
私はじいちゃんに抱きついた。私はじいちゃんが大好きだった。両親を早くに亡くした私にとって、祖父母は親の様な存在だった。だが、その幸せは一年前に消えた。二人揃ってあの世へ逝ってしまったのだ。だから、今年の夏休みには、祖父母のお墓参りに行く予定だった。祖父母と暮らす日々はとても幸せだった。でも、今は独りぼっち。悲しみに浸る間もなく高三になった。幸せは長くは続かないのだと、そう思い知らされた。そういえば、じいちゃんは龍笛を吹いていた。あの時聴いた曲は、何だったっけ。
夢うつつの中、私は目を覚ました。懐かしい夢を見ていた気がする。布団から体を起こすと見慣れぬ場所にいた。神社の本殿だろうか。朦朧としていた意識が徐々に覚めてゆく。あの時何が起きたのかを思い出した。
「そうだ、あの人どこにいるんだろう。」
起きて直ぐ横にいると思っていたが、何処にも見当たらないのだ。代わりに自分の荷物が横にある。静まりかえった薄暗い本殿。やはり、少し気味が悪い。
「とにかく、裕太郎さん？　を見つけて帰れるように話をしに行こう。」
このまま逃げたところで帰れる保証は無いだろう。もう一度裕太郎さんに会って話をしよう。そう思い襖を開けると、変わらず月が桜を照らしているのだ。とっくに朝になっていたのだと思っていたのに。いや、考えてみればここは幻想郷という世界。日が昇らない可能性もあるのだろう。本殿から出て桜の木の下まで歩いた。一枚の花びらが手に落ちる。本当に静かな場所だ。それに、何もかも忘れさせるような美しい夜桜。やはり見惚れてしまう。
「おやおや、本当に人間がいるなんてなぁ。」
振り返ると人間の男性と同じぐらいの背丈をした、三人の鬼が目をギョロつかせていた。
「あの狐野郎、こんな人間を喰うつもりなのか。」
「美味そうだよな。男だが人間は美味いと親方が言ってたぜ～。」
三人ともよだれを垂らしながら私に近づいてくる。
「し、失礼な。私は女だ。」
まさか鬼にまで間違われるなんて、本当に私って色気が無いんだろうな。その一言を聞いた鬼達は目の色

を変えた。
「人間の女。聞いたか、女だってさ。」
「ああ、しっかり聞いたとも。」
「これは親方の花嫁として攫っちまおうぜ。」
　これは嫌な予感しかしない。ただでさえ知らない世界だというのに、鬼どもに攫われるなんて。鬼どもが喜々として近づいてくる。逃げようとしても怖くて足が動かない。
「さぁ小娘、俺達と来い。」
「嫌だ。鬼の嫁なんて。絶対に嫌。」
「生意気な小娘だな。ここで喰ってやろうか。」
　腕を掴まれた。鬼の爪が腕に食い込む。
「痛い。離して。」
「あの狐野郎に小娘が喰われるのも癪だ。」
「生意気な小娘だし、親方の花嫁にもふさわしくない。三等分にしちまおうぜ。」
　一人の鬼が刀を抜いた。斬られる。どうしてこうなったのだ。妖狐を追いかけたら幻想郷という異世界に踏み入り、訳の分からない妖狐に眠らされ、終いには鬼に喰われる始末。自分の軽率な行動に怒りを覚えた。同時に絶望した。こんな最期を迎えるなんて。ねぇ、助けてよ、
「じいちゃん。」
　涙が頬をつたった。それと同時に刀が振り下ろされた。
「狐野郎とは、随分な口を聞いてくれるじゃ無いか。」
　振り下ろされた刀は裕太郎さんの指先で止められていた。そして、私の腕から鬼の手を放し、私を抱えて鬼と距離をとった。
「裕太郎、さん。」
「遅くなってすまない。もう、大丈夫だ。」
　とても優しい声でそう言うと私を地面に下ろし、鬼どもに向き直った。裕太郎さんの姿は狐の耳が生え、三本の尾を持った妖狐の姿となっていた。その美しい姿とは変わり、横顔は怒りに満ちていた。
「来やがったな、狐野郎。人間の小娘を独り占めだなんて、意地が悪いじゃあないか。」
「俺達にも喰わせろよ。」
「そうだぜ、生意気なんだよその小娘。仲良く分け合おうぜ。」
　喰ってしまおうと鬼どもが口々に言う。全身が震えて仕方が無い。
「誰が、いつ、この子を喰うと言った。」
　裕太郎さんの低い声が境内に響いた。
「この子は俺の許嫁だ。喰うなど言語道断だ。」
「え？」
　突拍子も無い言葉に驚いた。
（許嫁って、お嫁さんって事だよね。一体どういうつもりで……。）
　驚いたのは私だけで無く、鬼どもも動揺していた。
「何だと、貴様自分の立場が分かっていないのか。」
「そうだ、人間の娘を嫁にするなど身の程知らずが。」

「親方が許すはずも無いだろ。」
　殺意がむき出しになった鬼どもは、それぞれ刀を抜いた。
「親方に負けて、この古ぼけた神社に逃げたお前が、そこの小汚い小娘と結婚だぁ？　無理に決まってんだろうがよ。」
「そこまでして格を上げたいだなんて、妖狐の名が廃るぜ。」
「とことん可哀想なヤツだな。」
「ぎゃはははははは。」
　好き勝手に言う鬼どもは腹を抱えて笑っている。そんな鬼どもを私は許せず、拳を握りしめ裕太郎さんの前に出て、思いのまま叫んだ。
「お前達、いい加減にしろ。」
　突然叫んだ私を鬼どもどころか、裕太郎さんまで驚いていた。
「何があったか知らないけど、裕太郎さんを、私の命の恩人を悪く言うな。鬼畜野郎共。」
「⁉」
　境内中に声が響き渡った。裕太郎さんの瞳がわずかに揺らいだ気がした。何故裕太郎さんを庇うようなことをしたのか、自分でも分からない。でも、助けてくれた恩人を悪く言われる筋合いはないと咄嗟に思ったのだ。
「どこまでも喧しい小娘め。今に口を聞けなくしてやるわ。」
　怒りの限界に達した鬼どもが、一斉に飛びかかってきた。刀がギラリと光る。勢いで前に出たが、恐怖で体が動かない。私が余計なことを言ったから、鬼の逆鱗に触れてしまったのだ。今度こそ、斬られる。私は、目を瞑ることしか出来なかった。
「俺の嫁に触れるな。低級共。」
　私の肩を引き寄せ、鬼どもを狐火でなぎ払った裕太郎さん。ボウっと裕太郎さんの手から紅い狐火が出てきて、その狐火はたちまちに鬼どもを囲い込んだ。狐火の業火が鬼どもを襲う。
「ぎゃあああああああ。」
「二度と俺の嫁に近づくな、命が無いと思え低級共。」
　すると、狐火が消え去った。黒焦げになった鬼どもは、互いの体を寄せ合って震え上がっていた。心なしか、小さく見える。まるで、蛇に睨まれた蛙の様だ。裕太郎さん狐だけど。
「お、覚えていやがれ狐野郎。」
「親方に言いつけてやる。」
「いつまでも居場所があると思うなよ。」
　さっきまで黒焦げになっていた鬼どもは、わかりやすい捨て台詞を吐いて逃げていった。
（なんてベタな台詞。）
　そう悠長に思っていたつかの間。私はその場にぺたりと座り込んでしまった。目の前で妖怪達の戦いを見ていたのだから無理もない。
（体に力が入らない。）

だんだんと、手も冷たくなっていく。
「大丈夫か。怪我はしてないか。」
ふわりと裕太郎さんが着ていた羽織が私を包む。
「本当にすまない。怖かっただろう。鬼どもに囲まれて邪気に当てられたのだな。」
しゃがみ込んだ裕太郎さんが私の頭を撫でる。
「い、いえ、謝るのは私の方です。勝手に外に出て、鬼どもの怒りに触れてしまったのですから。ごめんなさい、裕太郎さん。」
そうだ、結局は私が勝手をしたから。裕太郎さんがいなければ、今頃鬼どもの腹の中だっただろう。自業自得だ。
「でも、裕太郎さんに怪我が無くて良かった。」
「優しいな、君は。あんなに怖い思いをしたのに、俺の心配をしてくれるのか。」
裕太郎さんはどこか儚い様子で笑っていた。
「やっぱり君は、彼奴にそっくりだ。」
「え？」
「いや、何でも無い。」
彼奴って誰だろう。そう思っていると、裕太郎さんが手を差し伸べてくれた。疑問を抱きつつも、その手を取り立ち上がった。境内は少し荒れてしまったが、変わらず月が桜を照らしている。
「改めて、助けてくれてありがとうございました。」
「礼を言われることなんてしてないさ。未来の嫁に傷が付いてしまっては大変だからな。」

そう爽やかに私に笑いかけた裕太郎さん。そうだ、なぜか許嫁宣言を鬼達にしていたんだった。
「まさかとは思いますけど、本気ですか？」
「ん？　どうしてそう思うんだ。俺は本気だぞ。」
「えええ、本気。と言うかどうしてって。」
もうどこから突っ込んでいいやら。裕太郎さんは首をかしげて見つめてくる。
「ちょっと待って下さい。許嫁ってお嫁さん（仮）みたいなことですよね。いや、もうお嫁さん同然って、あれ、許嫁って何だっけ。」
「ふふ、あはははは。君は面白いことを言うんだな。」
「からかわないで下さい。本気って事は分かりましたけど、どうして私何ですか。」
こっちが混乱しているというのに、裕太郎さんはずっと爆笑している。
「聞いてますか。私、見てくれとか自信ないし。それに多分、この世界の人達の方が綺麗な方が沢山いると思います。なのに、どうして私が許嫁なんですか。」
会って一日もしない人間を嫁にするとか、色々な疑問が浮かぶ。すると、裕太郎さんは私の目を見つめてこう言った。
「一目惚れってヤツだ。君が、涼がここに来たときから嫁にしようと思ったんだ。」
その紅い瞳にまっすぐに見つめられると、吸い込まれそうになる。裕太郎さんはやっぱりとても綺麗なヒトだ。でも、私は彼のことを知らない。すぐに結婚は、

やっぱり無理だ。何て答えたら良いか、私は頭をフル回転させた。
「あの、お、お友達からでお願いします。」
頭を下げて右手を裕太郎さんに向けた。どっちが告白したのかわからない状況。
（何を言ってんだ私は。考え抜いて出たのが、「お友達」って。）
馬鹿な返しになってしまった。きっと、裕太郎さん怒ってるだろうな。顔を上げるのが怖い。
「お友達、か。」
小さな声で裕太郎さんが呟いた。怒ってるというか、悲しんでいるような気がした。
「ご、ごめんなさい。えっとその、すぐには無理って言うか心の準備が出来て無くて。」
右手を引っ込め、お辞儀をしたまま必死に弁明した。
「顔を上げて、涼。」
恐る恐る顔を上げると、優しい笑みを浮かべた裕太郎さんがいた。
「ありがとう。」
そう言うと裕太郎さんは私を抱きしめた。
「ゆ、裕太郎さん。」
「ごめん、いきなり許嫁って言って。でも君は、友人としてこんな俺を受け入れてくれるのか。」
今にも消え入りそうな声でそう囁いた裕太郎さん。これは私の憶測だけど、さっきの鬼達の発言からする

に、裕太郎さんも独りぼっちなんだろう。それは、私も一緒だ。孤独は何よりも辛い。私が一番経験してきた感情。私は裕太郎さんを見つめ返す。
「少しずつでも良いんです。私は裕太郎さんを知りたいです。」
これがたとえ夢でも、私は裕太郎さんと一緒にいたい。同情なんかじゃ無い。ただ純粋に寄り添いたいのだ。
「それに私、妖狐にずっと憧れていたんですよ。そんな人に嫁だって言ってくれるだけで、私は幸せですよ。」
半分告白みたいなことを言った自分が恥ずかしい。友達からって言ったのに。
「涼。絶対に幸せにする。」
「ま、まだ友達ですからね。」
今にも式を挙げそうな勢いで言う裕太郎さんを慌てて止めた。
「ふふ、冗談だ。でも、ゆっくりお互いを知っていこう。そして、幸せになろうな。」
ちゃっかり結婚を視野に入れてる裕太郎さん。でも、その言葉が何よりも嬉しかった。
「そうですね。」
月明かりが私たちを照らす。この先の未来の私は、幸せでいるのだろうか。いや、その心配は杞憂で終わるのだろう。私は妖狐と、裕太郎さんと幸せになりたい。そう思いながら夜桜を見上げたのであった。

あの後、彼女は眠りについてしまった。鬼どもの退治の後、友人になると告げた彼女の寝顔はとても愛らしく美しかった。

「おやすみ、涼。」

彼女の頬を優しく撫でる。人間とはこんなにも愛らしくそして、脆弱な生き物だと改めて知る。彼女の腕には鬼に掴まれた跡が残っていた。

「必ず強くなって、立派な九尾になって見せる。」

俺の尾はまだ三本しか無い。彼女を守るためにも、彼奴との約束を守る為にも必ず強くなって見せよう。襖を開けて見慣れた夜桜を見上げた。代わり映えのしなかった景色がいつもより綺麗に見えるのは何故だろうな。懐から龍笛を出し、懐かしい旋律を奏でる。

「やっと、彼女に会えたよ、弦。」

【部門賞　小論文部門　受賞】

「個人のジェンダー観」

星槎国際浜松
一年　河島　悠人

ジェンダー平等と言っても、SDGsで掲げているジェンダー平等かLGBTQ＋の中でのジェンダー平等かで、意味が全く変わってくる。だが一概にLGBTQ＋と言っても分からないことだらけだ。だから、LGBTQ＋のジェンダー平等に対して身近な例から考えようと思う。日本はまだLGBTQ＋への対策が勧められている事に対して抵抗感を持つ人は少なくない。

それ故にいじめが起こったり、そこまで至らなくとも否定の意を示され、自分の趣味嗜好に対して自ら否定的になってしまう人が存在する。

私もその否定されたうちの一人だ。私は未就学児の頃は桃色の物を好んで買って貰ったり、母の真似をして化粧をしようとしたりと、女児が行うような事をする機会が多かった。

しかし、幼稚園児になってからは次第にその行動を周りの大人に否定されたり、同級生からの悪意が無い同調圧力が多くなっていき、段々と自分が女児に似た行動を取ることに抵抗感を覚えていった。そこからは長く、男児が取るような行動、身に付けるような衣服、好むような遊戯をする事に全くの疑問を持たずに日々を過ごした。

しかしそこから十年後、私は男性のネット活動者に出会った。その男性は小柄で声も高く、女性に間違えられる事が多い。だが、それをコンプレックスだとは思っておらず、むしろその容姿を有効活用するような活動をする事も少なくは無い。

私は最初、何も思わず活動を見ていたのだが、その人の容姿を使い活動する姿に感化され、その行動に憧れを持つようになった。それから私は周りの目や言葉を深く気にすることはせずに、自由に髪を長くしたり、中性的な服を買って着てたりするなどの行動することが増えてきた。高校に入ってからはメイクの仕方を習うなど、より憧れに近付けるような行動を取れるようになっていった。

自分はこれでもLGBTQ＋のカテゴリーに入っているとは全く思っていない。憧れる人が嗜好の問題を前向きに自己解決している姿を見て、自分も問題を問題だとも思わず過ごしてきたからだ。

だが同じような境遇を経験した人の小論文を見て、その人はLGBTQ＋の1つ「Xジェンダー」の項目にカテゴライズされることを認識し、同じ状況の仲間がいるから孤独では無いと感じているのだと知った。

社会的なジェンダーバイアスにとらわれず自分の個性を把握することで自己完結する人、他人に認められることで自分の居場所を知り充足感を得る人、様々な傾向にカテゴライズされることによって安心感を得る人、それぞれだと感じた。

このようにLGBTQ＋は人を認める1つの指標であって、自分の性に関する考えを助長させるものでは無い。私はLGBTQ＋について周りがそこに対するラインを個人の裁量で決め、押し付けて良いわけじゃないし、過剰な肯定、否定は人を傷つける行為であると考えた。

だからもしLGBTQ+に悩む人に出会ったら、私は完璧ではなくとも相手の意見を理解し、静かに寄り添える人間になりたい。

【部門賞　エッセイ部門　受賞】

「不戦敗は」

星槎国際立川
二年　室田梨紗子

みなさんは、「勇気を貰った歌　ベスト10」のような、テレビ番組のランキングを見たことはあるだろうか。

ランキング形式で発表されて、番組のゲストや渋谷辺りにいた人たちが、「その曲のこんな歌詞に私は救われたわ！」みたいなことを流すものだ。

私はそのような企画を一度ではなく、何度も観たことがある。

しかし、「そういうもの」を観たことはあったのだが、正直なところ、歌で勇気を貰ったり元気を貰う感覚が、私にはよくわからなかった。

物語に感動して涙を流すことはあっても、歌単体で

何か心を動かされたことは一度もなかったし、「歌に勇気って……いやいや、あんたがめちゃくちゃ頑張っただけでしょ」とまで思っていた。

ここまでの前置きでお分かりいただけると思うが、この話はそんな私が、歌で背中を押されるまでの話である。

その歌に出会ったのは今年の四月だった。

友達に勧められて、某アイドル育成ゲームを始めたのがきっかけである。

そのゲームの一人のアイドルに惹かれて、YouTubeでMVを聴き漁った。

聴き漁った歌の中に、後々蹴るような勢いで、私の背中を押してくれる歌があったのだが、当時は「カッコイイ～」「すごい」という感想を持っていた為、その時点では気付けなかった。

登下校中を始めとして、移動中はそのアイドルゲームの歌ばかり聴くようになった時、そのうちの一つの歌がかなり熱血で、真っ直ぐな応援歌のような歌詞だなとだんだん思い始めてきたのだった。

そして七月、学期末テストが終わり、私はバイトの面接を受けるためにある駅に降り立った。

それまでに私は二回バイトの面接を受けていたが、どちらも待っている時間が不安で、自分から辞退の電話をしていた状態だった。

三度目の正直、という言葉がかえってプレッシャーになって、マスクの中はカチカチと奥歯がぶつかる音がしていた。

面接をするビルの隣で私は立ち止まって、YouTubeを開いたとき、一番上に表示されたのがその例の歌だった。私は、その好きなアイドルの歌声が聴きたくなったという理由で聴くことにした。

好きなアイドルのソロパートが好きで、その部分に差し掛かった時、追い風と言うには甘くない、背中をバシッと叩かれたような感覚だった。

「勝負を投げ出してちゃ　永遠に勝てない」という歌詞。

好きなアイドルのソロパートが含まれているから、だけじゃ説明がつかないほど、とてつもない力を私は貰った。

決して私個人に向けた言葉ではないのに、私に向けた「逃げるな」という言葉よりも、何故だかすっと聞き入れられたのだ。

言っていることは変わらないのに。

きっと、「好き」という気持ちは、私のようなひねくれ高校生にも潤滑油の役割をしてくれるのだろう。

あのアイドルを好いていて本当に良かった、あの言葉を「なにこれ、説教みたい」と流さずにいられて良かった、と今は安堵している。

それからは、不安になった時にはその歌を聴いて、勇気を貰っている。

「勝負を投げ出してちゃ　永遠に勝てない」。バイトの合否から逃げていた私に「そんなの勝ち負け分からないじゃん」と教えてくれた言葉。

彼らはティッシュ配りのように、ホイホイと人を救っていくのだろう。

けれども彼らは存在しないので、ファンレターで感謝することは出来ないが、代わりに私の人生を変えてくれたことをここで話すことにした。

「自分を変えてくれる言葉は、きっとどこかにあるけれど、まだ視界に入っていないだけかもしれない」、それは聞き飽きたと思う。

では、私とおそろいのひねくれ仲間ならば、「好き」がある場所からそういう言葉を探してみるといいかもしれない。

文字や音の列でしかない言葉は、きっと想像するより何億倍、何兆倍と力をくれる。

まあ、その後は確かに、自力でめちゃくちゃ頑張らなければならないけれど。

「超現実主義」
荒木　麻鈴（星槎学園北斗校高等部２年）

「天空」
松平　佑（星槎国際小田原1年）

【部門賞　詩部門　受賞】

「二人の兄」

星槎国際仙台
二年　小幡　星奈

私には二人の兄がいる
一番目の兄は強くて面白い
二番目の兄は優しくて面白い
最高なのではないか？　と思う
私は二通りの最高の兄を味わえる
悩みを相談するときは
一番目の兄はわざと明るく振舞って
二番目の兄は親身になって聞いてくれる
その時の気持ちによってほしい返しを選べる
どちらも最高な兄だが
けっして同じな訳ではない
どちらも唯一無二なのだ

【部門賞　俳句部門　受賞】

星槎学園大宮校高等部
一年　夏秋　拓真

風鈴の　つれてきたるは　音の風

【部門賞　短歌部門　受賞】

「祭り」

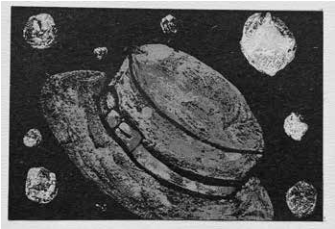
星槎国際厚木
一年　岸本　そら

かわいいと　君に言われる　期待して
奥に眠った　浴衣を探す

【生徒会特別賞　俳句部門　受賞】

星槎国際大阪
一年　上田　七海

帰り道　行く手を阻む　蝉地雷



「カンカン帽」
長島　美咲（星槎学園湘南校２年）

「夏」
山口美優香（星槎国際浜松２年）